

## 株式会社 スバルグラフィック

●代表者/代表取締役社長 松本 脩 ●創業/1982年2月 ●従業員数/60名  
●所在地/東京都中野区野方4-20-4 ●URL/www.subaru-g.co.jp

## 印刷のデータを最適化

## 生産効率が2倍にアップ

(株)スバルグラフィックは、「誠実・努力・継続」を基本方針に、顧客に満足してもらえぬ製品とサービスを提供している昭和57年創業の総合印刷企業である。本社(東京都中野区)に加え戸田工場(埼玉県戸田市)、舟渡工場(東京都板橋区)とふたつの製造拠点を構えている。富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(株)の「XMF Complete」「XMF Remote」を活用し、前工程から印刷、後加工、さらには顧客までをシームレスに繋げる体制を構築している。

同社が新しいワークフローを導入した理由のひとつが、工程の「見える化」だ。とくに印刷物制作の効率アップに重要なプリプレス部門の従業員に、作業している印刷物の最終形態がどのような製品かを

明確に認識させ、プリプレスの段階で印刷データの最適化をコントロールしようと考えた点である。

「プリプレス部門はデータを加工することも多い、だからこそ後工程の知識も持ってもらい最終製品を作り上げる意識を持たなくてはいけない。そのためには仕事に人を当てはめることをやめ、ひとりでプリプレス工程のすべてを行うフローに変えたところ、社員の視点や意識が変わった」と同社戸田工場の坂井陽一工場長は語る。

プリプレス部の社員は後工程まで考慮した上で自ら判断できる視野の広い人間に育つ。そうやって初めて、新たに導入した「XMF」が生きてくるという。活かすという点において、独自のMISシステムと「XMF」を連携させて、さらなる効率化を図っている。



「見える化」効果で印刷時折見本もなくなった



見える化し、モニター上で仕事の状況が分かる

MISシステムと制作データが格納されているファイルサーバーをリンクさせているため、過去の製版データを呼び出す場合もMISに登録したジョブ情報から簡単に呼び出せる。また、MISからいつでもJDFを「XMF」に送れるため、すぐに再版業務を開始できる仕組みになっている。営業は受けた仕事の仕様、納期などをMISに入力すると、それを受けたプリプレスの社員がひとりでプリプレス工程に必要なプリセットを「XMF」内に設定し仕事を進めていく。

前述したように、プリプレス部の社員は印刷の最終形態までイメージできるよう訓練されているため、クライアントの意図したとおりの印刷物を作り上げるために、社員自ら後工程を考慮した設定を行うことができる。

「最近では社内確認用の折見本を作ることもなくなった」と坂井工場長は工程改善の効果を嬉しそうに語る。

印刷物制作のためのキーマンを育成し事業を進める同社に、生産の効率化状況を聞くと、「XMF」を導入したことで、MIS、ファイルサーバーなどの連携もあいまって、非常にスピーディーになったという。以前までの生産工程と比較して2倍は制作進行が早くなったと同社では認識している。

これは、データを探す手間や次工程への申し送りの手間が短縮されただけでなく、「XMF」のストリッピングシートテンプレート機能がかなり貢献しているとのこと。通常の面付け作業では、印刷物の最終形と印刷機の特性を考慮する必要があるが、ストリッピングシートテンプレート機能を使えば、組み合わせを選択するだけで最適な面付け設定が行えるという。

これにより、プリプレス工程の大幅短縮が実現できたのである。

自社ワークフローの最適化に取り組んでいる同社は、「XMF」のもうひとつの特徴である「XMF Remote」も組み合わせて導入しており、こちらはその特徴からホテルや海外のクライアントで活用できるとテストを積み重ねている最中である。

「XMF Remote」は、ブラウザ対応でどこでも誰でも確認と指示ができる。データ作成時における検版機能を搭載しているため、クライアント先で校正を確認してもらい印刷工程の進行を早めることが、同社の制作工程において大きなメリットと考えている。

作成した印刷データを「XMF Remote」の画面上で承認ボタンを押してもらえると、ただちに印刷データはCTPおよび印刷工程に送られる仕組みとなっている。ただ、今までの商慣習もあり、すべてのクライアントに「XMF Remote」の利用をお願いするのはむずかしい。

そこで坂井工場長は「営業部員が先方からの承認を得られたら承認ボタンを押せと指導している。外出先でも承認ボタンを押せるため、営業がクライアント先から帰って来るのを待たなくても印刷開始できるようになった」と話す。

さらに、社内ルールを徹底させ、仕事をスピーディーに進めるために導入したXMFの印象は、「プロフェッショナルな人間が扱って初めて活きるシステムであり、その高効率性が顧客に対し問題解決策として提案できる」と評価する。